

# 穴性について

一元流鍼灸術代表 伴 尚志

四診を行い経穴をよく観察して弁証論治を作り上げ、経穴の変化をよく観察しながら治療を行う。このような臨床を積み重ねていって気がつくことは、患者さんが個別具体的な身体を持っているということです。それぞれの体質に基づいたそれぞれの生活習慣にのっとった生活の中で、個々の患者さんはそれぞれに特有の四診の状況および経穴反応を示しています。

そこで、四診に基づいて弁証論治を立て、体表観察に基づいて治療法を決するということが、鍼灸師の基本的な立ち位置—治療方法になるべきであると考えてきました。

『一元流鍼灸術の門』の〈実戦編〉において、〈経穴を見つけるための経穴学〉を述べつつ、「生きて働いているすなわち反応が出ている経穴を使用すること」「生きて働いている反応を見つけるために、特効穴や穴性学を参考にしながら体表観察を行うこと」「経穴の出方の理由をよく考えて処置を行うこと」を提示しているのはこのためです。

そのような治療を継続していると、「四診によって把握された身体以前に「経穴の効能」があるのではない」ということが理解できるようになります。経穴の反応は患者さんの体質によって変化するものであり、現れている症状とその経穴の効能とが直接そのまま結びつくわけではないのです。

患者さんの身体の状態を把握する弁証論治にしたがって、生きて働いている経穴を探り、その反応が出ている意味を考察し選別して処置することこそが大切です。民間療法的な経穴学（特効穴治療）あるいは穴性学をいかに探求し積み重ねていっても、実際に患者さんを目の前にすると使うことができない理由はここにあります。

けれども穴性学は、これから日本で重要視されていくであろうし、そうでなければならぬと、私は考えています。穴性学が発想されてきたのは、中国においても長くとも百年ほどの歴史しかありません。それ以前は、鍼灸歌賦とか経験方（そして局所あるいは循経施術）によっていたものです。

ですから、穴性を踏まえて配穴する、と言っても、鍼灸歌賦にしたがって配穴するといっても、経験方にしたがって配穴するといっても、そのどれに優位性があると判ずることはまだできないと、私は考えています。つまり、穴性の概念は鍼灸歌賦によるものや経験方によるものと同じように、まだまだ検証する必要がある概念であるということです。

そして、その検証を行うためには、人間そのものを包括的に把握する概念体系が必要なわけですから。どうしてかという、人間観がないところに表裏寒熱虚実といった概念を適用することはできないからです。一元の生命体として人間を把握することによってはじめて、表裏寒熱虚実という概念が生きてきます。五臓六腑あるいは五行という概念もそこにはじめて生きてくるものです。経穴は、そのように把握された身体に表されている指標です。それはまさに個人個人の生活習慣や思いの継続によって表現されているものです。

ですから、体表観察をして何故その経穴にそのような反応が出ているのかということ判断するには、相手の身体に対する認識と、経穴に対するある程度の知識が必要となります。それがおおきな人間観一気一元の身体観で統一されたときにはじめて、経穴に関する考察ができるわけです。この積み重ねによってはじめて、穴性に関するしっかりとした検証体制ができあがってくると、私は考えています。

そしてそれは実は、穴性学が崩壊する端緒となるだろうともまた考えています。その理由は、経穴の出方が個別具体的であることによります。東洋医学は、養生の医学です。そしてそれはいつも個人個人の特性にしたがって、個別具体的にかつその時だけに適用される養生法の指示であり経穴に対する処置です。このことは体表観察をしているとよく見えることです。

机上の理論で弁証論治を行って穴性にしたがって使用経穴を定める方法では、このことはけっして見えてきません。いわんや、穴性というものがあたかもアプリオリに存在するかのように思い込み、それを机上で探求して「正しい」穴性学を定めて運用しようとするという現行の中医学ではけっしてたどり着くことのできない地平です。

黄龍祥先生の論文「腧穴（ツボ）の主治の表記をいかに標準化するか」

<http://www.jtcma.org/activities/img/tsubonohyouki.pdf> において書かれている文言も実は、この経穴の個別具体性について考察されているものではなく、ただ単に穴性のまとめ方が、これまで薬性をそのまま使用してきたものを改めるべきだと言っているに過ぎません。レッテルの張り替えに過ぎないわけです。

経穴に触れもせず穴性概念だけで何事かが定まると考えるには無理があります。なぜ

なら、経穴は患者さんの身体に存在し、それ自体の表情をもって指頭に語りかけてくるものだからです。この言葉を聞きつつ、それに対応した処置を行うのでなければ、いったい何を診て治療しているのでしょうか？経穴の状態を理解できずに穴性を語り処置を施すということは、傲岸不遜であり、毎瞬息づいている人間の生命に対する傲岸無知のなせる技であると言わなければなりません。